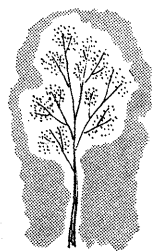


旅・発達 (四)



津 守 真

二十年前に、私が米国の大学で学んでいたころ、児童発達の講義の中で、教授より、動物生態学者、ティンバーゲンの名前を聞いた。彼は、動物の行動を研究するのに、実験場面や、つくられた環境の中では、その動物の固有の行動があらわれにくいと考え、自然の生活の中で観察することの重要性を強調したのである。児童心理学の分野でも、実験や調査が盛んになりつつある時期であったが、子どもの自然な生活の中での研究が必要であることがそこで論ぜられた。そのときにきいたもうひとつの研究は、ロージャー・バーカーの行動生態学のことであった。彼は、ひとりの子どもが、朝起きてから、夜ねるまでの生活の中の行動を、詳細に観察し記録して、それを丹念に分析した。もちろん、数人の記録者が交代で記録し、米国の研究のことであるから、信

頼度や妥当性の吟味も手落ちがないように仕組まれている。こういう方法で、彼は、乳児、幼児、児童、いろいろの年齢で、いろいろの日常生活場面について研究している。この二つの研究は、生きた生活そのものの中に動いているものをとり上げようとしている研究として、私には新鮮に感じられた。その後、日本に帰り、お茶の水女子大学の付属幼稚園で、あのいきいきと遊び、毎日、思いがけないことが展開していく保育に、しげしげとふれていて、ティンバーゲンとバーカーのことがいつも頭から離れなかった。子どもらしい、生きた生活を生み出す保育はどこにでもあるものではなく、子どもの生活をそこまでもつていくのはたいへんなことである。そのような生活を、学問の面でどうとらえたらよいかということが、それから長い間、私の研究課題であった。

今回のモントリオールの旅から帰ってすぐに、サイエンスという米国で発行されている雑誌の最新号の中に、ティンバーゲンが、一九七三年にノーベル医学賞をもらったときの受賞記念講演がのっているのが目にとまった。その中で彼は、行動をありのままに見て、これは何だろうと不思議に思うという昔ながらの方法が、いかに重要かということをくりかえし述べている。それこそ、彼がこれまで魚や鳥の生態の研究に用いてきた方法である。

(ティンバーゲンは、これは自分が作り出した方法論ではなく、古くから人々がしてきたことを自分が新たに見直しただけのことだとただし書きをつけている)そして、このような方法論が、現代の緊張から生じる病気の治療と関係があるのだと述べて、二つのことを取り上げる。その第一は、幼児の自閉症についてである。幼児の自閉症といわれる症状は、最近の西欧化された社会で増加しつつあること、その診断、原因、治療法などさまざまな意見があり、そのいずれも満足のいくものでないことを、文献に沿ってのべてから、自分たちがどのようにしてこの問題に興味をもつに至ったかをのべている。(私も、動物生態学者、それも魚や鳥を専門としてきたティンバーゲンが、どうして自閉症の子どものことに関心をもつようになったのか、興味深く思った)

一九七〇年に、ジョン・ハット夫妻の書いたものの中に、他人

と目をあわせないこと以外は、自閉症の子どもの社会的場面ですす行動はすべて、普通の子どもにも見られるものであるという一節を読んだとき、ティンバーゲン夫妻は「はっとしてすわりなおした。なぜなら、私どもは長年、普通の子どもを見ていて、カナ1のいう自閉症の症状の要素は、すべて普通の子どもに認められるものであることを知っていたからである」

こうして彼らは、普通の乳児の観察にとりかかると、幼い子どもをもった家庭を訪問したり、訪問されたりするとき、大人はまず子どもを親しく見るが、次には子どもを無視して、大人同志の会話に移る。そうしながら、目のすみで子ども行動を見ることができるし、それに合わせて振舞うことができる。ある子どもは、その見知らぬ人をじっと見つめて、注意深く研究する。こうなれば、ときどき子どもの目を見ても安全である。そのとき、もしも子どもが目をそらすなら、目による接触は直ちにやめた方がよい。こういう子どもは、大人のひざに手をおいたりなど、触觉による接触によって近づこうとする。こういう時がだいじな瞬間である。このような子どもに、大人は、見ることによって反応してはならないのであり、注意深く子どもの手にふれていく方がよいのである。そうして、もし必要なら立ちどまり、子どもの反応に応じて、一歩退き、しだいに、触觉によるふれ合いによって、子

どもを安心させていくことができる。こうして、一緒に笑ったり、声をかけたり、物を渡したりなど、微妙な交流の後に、目を合わせるができるようになる。この過程を通して、子どもの微妙な表情までも理解して、それに合わせておとなが振舞っていくのである。この普通の子どもについての観察を心にとめて、自閉症児にも、同じように、その微妙な心の動きに合わせて近づいていくと、多くの表情があらわれ、大人との交流ができていく。ティンバーゲンは、そのようなセラピーの事例経験を述べて、多くの自閉症児は、環境的な緊張によって生ずるものであるという。

「こういうわけで、自発的に人、物にふれていくことができるようにすることによって、不安をとり除くことを目的とするようなセラピーの方が、特定の技能を教えることを目的とするセラピーよりもずっと成功するのである。不幸なことに、すでに述べたように、印刷された報告からは、実際にどのようなセラピーがなされたかを判断することが困難である。たとえば、あるスピーチセラピストは、子どもの中にふみこんで、子どもを訓練されたサルのようにみなし、他の症状はすべて顧みない。あるいは、かえって悪くしてしまうのである。……」

こういう自閉症の子どもが西欧化した社会に増加しつつあるよ

うに見えるということは、自閉症に準ずる子どもは、もつとたくさんいることを示すものであろう。実際、現代の都市生活には、個人生活にも、社会生活にも緊張が多く、親も教師も、自分自身の不安の中に閉じこめられて、子どもが目の前にも、その微妙な心の動きを見ることができず、それに合わせて振舞うような心のゆとりがない。そこには、子どもへの行動をありのままに見て、これは何だろうと不思議に思う興味も出てこないであろう。

ティンバーゲンは次に、アレクザンダーという俳優が、声が出なくなつたときに、自分の体の姿勢と心の状態とが関係があることに気づいて、そのことを仔細に観察することから編み出したセラピーのことを述べる。それは五十年前も以前のことで、医学界からは無視されつづけてきたのであるが、それは現代的な観察法であり、その業績は注目すべきものであるとして、おもしろい事実がいろいろ述べられるのであるが、ここでは省略しよう。最後に、ティンバーゲンは、幼児自閉症とアレクザンダーの治療法という二つの特殊な事例に共通なことは何かという問を發し、まず第一に、心を開いた観察——ありのままに見て、これは何だろうと不思議に思うことの重要さを知らせてくれることにあるという。この基本的な方法は、大がかりな近代的な器具や、検査や、薬品などに目を奪われて、見下されることがしばしばである。し

かし、動物の生態の研究における、この素朴な観察が医学においても役に立つものであることを強調して終わっている。

ティンバーゲンの「生態学と緊張病」という講演を紹介して、大分長くなってしまった。最初に述べたように、私は、この人を、魚や鳥の研究者として知っていたのであるが、その人が、子どものことにふれて研究しているのを見て大へんに驚いた。そして、その乳児の観察など、さすがに微妙なところにふれた観察をしており、感嘆した。(ここでは、なまの記録の詳細を記すことはできなかつたが)そして、私自身、研究者として幼児の行動を見るときに、このようなあたりまえの観察ができていくかどうか反省させられた。また、このような素朴な観察は、保育者にとっても共通に必要なものである。そこから出発して、これは何だろうと不思議に思うと、子どもの行動は、ひとつひとつ、実に興味深いものであり、次々に多くのことが考えられてくる。二十年前に、ティンバーゲンの研究方法にはじめてふれたときの新鮮な感動が、新たに心よみがえって、身近なところにある、この素朴な観察を、これからもたいせつにしていこうと思った。

外国の風土や人にふれるたびに思うことであるが、人間のまごころや、喜び、悲しみには共通のものがあるが、社会生活の中で

の考え方や物の見方には、日本人とは違ったところがいろいろある。長い間の歴史や風土の中で、人の心の深いところに作られているものがあるのだろう。夏の旅から帰ってからしばらくして、私は、大阪の丸山先生から、最近、赴任された土地の子どもには、市の中央の地域の子どもとは違った落着きがあるから、一度来てみないかというお誘いをうけた。私はさっそく出かけてみることにした。

小学校の古い校舎をそのまま使っている幼稚園は、幅が二尺ほどもある床板を用いてあり、床板の継ぎ目から、床下の地面が薄明るく見えるところがある。子どもたちは、お化けが出るといって、そこからのぞくのだそうである。園庭のすぐ下は河原で、その向いの山が正面に見える。裏山はみかんの畠で、昨年は豊作だったので、父兄がリヤカーでみかんを運んでくれるほどだったとのこと。松阪駅からバスで三十分ほどの射和（やわ）というところである。そのバスは一時間に一本で、交通に不便なところである。近くを通る街道は、昔は、紀州の殿様が参勤交代で江戸に行かれるときに通られたそうであり、昔は交通の要所だったとのことである。この射和の商人が、紀州家にお金を用立てていた（い）から、昔は勢力をもった町であったと思われる。

私が訪れた日の午後、丸山先生に案内されて、その街道からさ

らにはずれて三十キロほど西にある丹生^{トウキウ}の水銀鉱に行くことになった。あたりには人家もない低い山の奥に、真黒な穴が口をあけている。石を投げると底の方でどぼんという音がかえってくる。

いまは廃坑になっているが、和銅年間から掘りつづけられた日本でも最古の水銀坑とのである。奈良の東大寺の大仏を鑄造したときにここから水銀を運んだのだそうだから、ずい分古い話である。私は、はじめは、何でこれが射和の幼稚園と関係があるのかわからなかったが、しだいに明らかになってきたことがいろいろあった。ここで掘られた水銀は射和で加工され、化粧に使うお白粉などになり、松阪の商人の手によって、京、大阪や江戸にまで売りさばかれた。射和は、このような古い時代から、松阪商人の背後にあって繁栄した町であった。この小さな町には、昔ながらの家が多く、おじいさんの、そのまたおじいさんの、子どもにとっちはいつのころからかわからぬほどの過去からそこに住んでいる人々が多いらしい。幼稚園の子どもたちは、おじいさんやお父さんがそこで生まれてそこに住んでいるように、自分もまた、そこで大人になっていくであろう未来を疑うことができないような環境である。子どもたちの心に落着きがあっても不思議はない。

古いということは、落着きがあるということだけではない。長

い間消えることのない人間同志のさまざまなことがあるだろう。伊覆寺という射和の町の和尚さんから、この町の歴史をいろいろと話をきく機会が得られて興味深かった。そのむかし、奈良朝の時代に、僧行基がここに来て、人々が極悪非道であるのを見て、丹生でとれる水銀鉱をここで処理することを教えたという。

(丹生の神宮寺には、その鉱石を砕いて入れた木のくりぬぎの壺^{ツバ}と、それを火にかけたやきものの碗^{ワン}が保存されている。奈良時代のものといわれ、箱にはサンスクリットの古文字の表書きがあり、判読できない。それをも見る機会が得られたのは貴重な体験であった)その後、時代は下って応仁の乱のとき、京都より逃げ落ちてきた武士が、この寺のある場所二つの大川にはさまれた中州^{ナカノシマ}に居を構え、追手をおそれて名もTとかえてそこに住みついた。そこに麻園をつくり、織物を織る技術を教え、江戸方面にまで販路をひろげた。それが、この町の近世の繁栄の基礎となったという。T家は四方白壁の八ッ棟造りの門構えの豪壮な家だったという。その八ッ棟の門は、もとはといえは、外敵を防ぐとりでの役を果たすものだったということである。T家の菩提寺として建てられたこの寺には、本居宣長や賀茂真淵の書や、江戸時代の有名な画家の画いたものが、ところ狭いほどにある。そこにすわっていると、江戸時代に住んでいるのではないかと思うほどであ

る。いずれもT家の寄進によるものであるという。

その中に、とくに和尚さんが説明して話されたふすま絵がある。虎の河渡りの図で、四枚のふすまに画かれた大きなものである。母虎が子どもの虎を背にのせて激流の河を渡っている。この虎には三匹の子どもがいて、その中の一匹は乱暴な性質で、きょうだいの虎と岸に残しておいたら何が起ころかわからない、そこで母虎は、まずこの子どもを背にのせて向う岸において、引返して二番目の虎を運び、その虎を背にしてもにもどり、その子を置いて三番目の虎を向う岸に運び、またもどってこのやんちゃ者の虎を背にのせて激流を渡ったとのことである。もしかすると私の説明に間違ったところがあるかもしれないが、要するに、この母虎は、乱暴な子どもをとくに心配し、困難や危険をおかしても、どの子どもにもよくなるように気を配ったというのである。これは人間の保育者の最高の心づかいであり、本能をもってそれをなしている虎を画いた画家の目は、子どもをの保育を心得た眼であると思った。このお寺のご息女が幼稚園の先生であることをつうかがい、教員養成学校で教えられるずっと以前から、日本の文化の中で培っているもの大きさを思わせられた。

翌朝、私は射和幼稚園を訪れた。松阪市内から市営バスに乗って行くと、あちこちの停留場から、子どもたちが何人かずつ乗っ

てくる。間もなくバスの中は幼稚園の子どもたちでいっぱいになる。まるで専用のスクールバスのようなのである。バスの中で、シールを見せ合っている子どもたちもいる。幼稚園の前でバスがとまると、先生方がバスの扉のところまで出迎えておられる。子どもたちの後についておりた私も、見知った先生方の顔を見てほっとする。

次々に子どもたちが集まってくる保育室にいく。子どもたちの私に対する最初の反応は、いつも幼稚園を訪問するときの私の大きな興味のひとつである。部屋に入っていくと、すでに来ている子どもたちが、つつ立ったまま私の顔をボケッと見る。だれも一言も発しない。しばらくの間、じっと見て立っている。少しずつ私との会話が始まるのは、それからずっとあとである。はじめての訪問者に対する反応は、幼稚園によっていろいろである。「おじさん、どこからきたの？」と声をかけてくれるところもある。

「いいのみせてあげようか」と、私にだじなものを見せてくれる子どもがいるところもある。子どもから親しく声をかけられると、こちらも気持ちがあなごみ、子どもたちの中にはいりやすくなる。感情のこもらない調子で、「お早うございます」と形だけのようなあいさつをされると、お客さまになっっていなければいけないような気がして、よそよそしく感じられる。子どもたちがよ

く遊んでいるところに訪れると、私など眼中にないかのようである。米国の幼稚園でも、日本の幼稚園でも、そのいずれもがあつておもしろい。

射和の子どもたちは、そのいずれとも違う。じつと見つめて立っているだけである。私にとつてはこういうところはめずらしい。私は、そのゆっくりとしたテンポの中に引きこまれて、そのまま、そこに腰をおろすよりほかなかった。それからしだいに気付いたのであるが、子どもたちは、あまり動きまわらないで、ひとつのことをじっくりとやる。それぞれが好きなおめんにあつて特色のあるものを作っているが、長時間、ゆっくりと、そのことをやっている。

丸山先生の話によると、松阪市内では、アパートの狭い部屋で暮している子どもたちは、幼稚園にくると、まず幼稚園中を駆けめぐることが、ここにはそういう子どもはいないのだそうである。射和の子どもたちは、どこの家も古くからの家であり、子どもたちは、自分の家の中と、家のまわりだけで、十分に遊ぶことができる。そして前にも記したように、子どもをとりまく大人たちは、ずっと昔からここに住み、ここで生まれて、ここで育った人々である。子どもたちもやはりここにずっと住むことに疑いをもつて

いないであろう。(それが、実際に許されるかどうかは、わからないことであるが) こういう点は、東京の子どもたちはまるで違ふし、米国の子どもたちはもつと違う。米国の子どもたちは、大きくならないから同じ町に住むと思つている者はほとんどないであろう。実際大人になつてから、あちらこちらに散らばつていく状況は日本以上である。また、米国の子どもたちは、親か祖父母か、外国から移住してきた者も数多く、二、三代さかのぼれば、その先祖は、世界中に散らばるだろう。

射和の子どもたちは、帰るときも市営バスである。ちょうど、中学と高校の定期試験の時期で、真黒な制服の集団の満員バスの中に、幼児たちがつめこまれていく、私は心配になつて、先生にたずねたが、中学生も高校生も、みんな、どの幼児はこの家の子で、どこで降りると知つているから、親切にしてくれるし、おりに損なう心配もないのだそうである。

この落着いた古い町にも時代の波は押し寄せつつある。何年前に、行政指導によつて、裏山の林を伐採して、みかん畑の造成を奨励したのだそうである。そのみかんは、昨年は作りすぎて、出荷するだけ損になるので、川原に捨てている。みかん畑は放たらかして雑草が生え、父親たちは、工場に出かせぎにいく。山の木を伐つてみかんの造成をしたため、昨年の七月には鉄砲水が出

て、幼稚園の床まで水についた。こんなことは、昔から長い間なかったことだそうである。そして、園児の父母が給出で、泥運びをし、清掃してくれたとのことである。幼稚園のことを自分のこのように思つて世話をするというようなことは、都市では見られないことである。

こういう中で、幼稚園の先生たちは、子どもたちを川原につれて行き、みかん山につれて行き、小さいときに、自然の環境に十分に親しむように一生懸命になっておられる。火をたく煙やにおいがいいといつて餅つきをしたり、室内では、こまをまわし、木工をしている。木工をするときには、子どもたちは、幼稚園の備え付けの子ども用の金づちよりも、うちの金づちの方がよく打てる、といつて、うちから持つてくる。どこを打つのはKくんのがいいといつて子どもの間で、金づちの種類や特性をよく知っている。庭に出ると、おとし穴をつくるといつて、子どもたちはスロップで穴を掘る。おとし穴を掘るくらいおもしろい遊びはないが、いまの子どもたちのどれだけがそのよろこびを知っているだろうか。子どものためにある幼稚園ですら、庭をシャベルで掘ることを許されるところは少ないのが現状であろう。おとし穴を掘れる射和の子どもたちは幸いであると思つた。

古い文化をもち、自然に恵まれた土地に住む幼児と幼稚園にふ

れて、私も心が落ち着き、心の中がひろくなったように思えた。そして、こういうところに米国の幼児教育のプログラムをもってきたとしたら、どうなるだろうかど考えたりした。それは、あの国の文化や風土の中で、素直に前進的に協力し合える人々の生み出したものである。その土地での問題を解決するために、——異質の文化の背景をもった人々が、同じ言語を用い、互いに理解し合つていくというような、そういうことのために、——考え出した方法である。その積極的な協力の仕方は、実に気持ちのよいものである。しかし、異なった文化や風土の中に、目に見えた成果だけをもつてきても、その精神は失われて、手近なことに利用するだけに終わることになりかねない。

これからの日本人が、世界の人々とまじわつて、人間としての共通な大きな心をもつて生きていくことができるように育つということは、日本の教育の大きな課題であると私は思う。いつ、どこで、どのようにして、ということとは、人間の生涯の発達という大きな流れの中で見ていかねばならないことである。いろいろな能力も、外国語も必要である。それぞれに適切な時がある。幼児期にたいせつなものは何であろうか。前にもふれた、私の描画の研究でも指摘したように、二歳の子どもでも、自分が探し求めて

いる世界があつて、周囲の大人の理解や助力の中で、子どもは自分の世界の中に、自分で中心を見出していく。二歳の子どもの中にも、大人にも共通な、そして子どもらしい豊富な世界がある。

これは一例であるが、幼児期に子どもは、人生の真実の基本を学んでいくといつてよいと思う。それはおそらく世界中の子どもにも共通のことである。それには、子どもの生活が自分自身のものとなつていくだけのゆとりがあること、自然にふれることができること、他人のまごころにふれることができることは欠くことのできない重要なことであると思う。夏の旅を終えて、あらためて考えさせられたことである。

訂正 五月号60ページ

赤ちゃんのおみそや―教育の中における障害児差別について―
は、「教育の中……」の誤りですので訂正いたします。

編集部



沖縄
みやとり幼稚園風景
(25ページ参照)

泥ねんど遊び